

玲瓏^{れいろう}として

玲瓏として

森川 泰樹

絵…小西 美幸

気持ちのいいさらりとした風と、ほんのり紅く染まっている葉っぱが夏の終わりを告げている。今日は休日ということもあり、広場は観光客で賑わっていた。若者や子ども連れの家族、お年寄りや外国人観光客など数え切れないほどの人々が往き来している。その人混みを肩ですり抜け、レモン味のソフトクリームを両手に持ちながら、彼はベンチに座っている私の元へ歩いてきた。

「ありがとう。今日は涼しくていいね」
「そうだね。何してたの？」
「人間観察」
「相変わらずだね」
そう言っただけながら、彼は私の隣に腰掛ける。二人でこの千光寺公園を訪れるのは二度目。一度目と違うのは、制服ではないこと、平日ではな

いこと、そして、彼がもう私の彼ではないことだ。

「痛っ……」

ソフトクリームを食べていた彼が急にこめかみを押さえる。

「ちょっと、大丈夫？」

「急に食べ過ぎただけだよ、ありがとう」

「気をつけてよね……」

私たちは小さな頃からお互いのことを知っていた。幼稚園から高校まで、ずっと一緒だった。いわゆる幼なじみというやつだ。

高校二年生の春、私は彼の交際の申し出をその場ですぐに受け入れた。

約一年の交際を経て、別れ話を彼が切り出したとき、私にはわかった。もうこれは何を言っても

無理だと。私は彼のことを理解しすぎていたのだ。高校を卒業し、私は地元の専門学校へ、彼は九州の四年制大学へと進学した。私は人生で初めて、彼がいない街で生活することとなった。その二年間、気づけば彼の後ろ姿ばかりを探していた。いるはずもないのに。

専門学校を卒業し、就職して数年。

ある日の夜。携帯電話に着信があった。

表示された名前は、彼の名前だった。

ソフトクリームを食べ終わり、背伸びをしている彼に一応尋ねてみる。

「それで？ 何か思い出した？」

「ごめん、やっぱり思い出せなかったや」

「そっか……」

彼が申し訳なさそうに俯く。



仕方ないよねと自分に言い聞かせながらも少し落ち込んでしまう。わたしは今でも鮮明に覚えている。このベンチで、ラムネを一气飲みしてむせた君の背中をさすったこと。ビー玉の取り出し方がわからなくて困っていた君。そのときのビー玉は、今でもまだ宝箱の中に入っている。

「じゃあ、思い出せるようにもっといういろいろ回ってみよう」

「そうだね、ありがとう」

「次は展望台に上ってみようか」

他の観光客にぶつかからないように、狭いらせん階段をゆっくり上がっていく。広い場所に出ると、真っ先に目に入るのは日光に反射して、きらきら輝いている海。そして千光寺山に生い茂る葉の緑と尾道駅周辺の高いビルや駅前広場の広場。左手には尾道大橋、右手には尾道市街の景色が見え

る。渡船が尾道水道を渡って、向島へと向かっている。頬をなでる柔らかな風が心地いい。手すりの近くには設置型の双眼鏡がある。彼はそれを見るやいなや、駆けだしてのぞき込んだ。

「何も見えないんだけど、壊れてるんじゃないの？」

そこで私が硬貨を入れる。

「あつ……見えた」

「お金入れないと見えないんだよ」

「そうだったのか……ありがとう」

ぼつが悪そうに彼はおでこをかき。困ったときの彼の癖。変わってない。

「どう？ 何か見える？」

「船が見えるよ。船の名前や乗っている人まで。駅前の横断歩道を渡っている人もはっきり見える。商店街に向かっているのかなあ」

彼はやはり覚えていない。このやりとりが二度目だということを。



周りを見まわすと、日曜だというのに制服姿の女の子がひとりで手すりにもたれかかって町並みを眺めていた。誰かと待ち合わせかな。そう思った矢先、同じく制服姿の男の子が彼女の元へと走ってきた。遅れてごめんね、と男の子。今来たところだから大丈夫だよ、と女の子。少なくとも私たちが来るよりは前からいただろうに。男の子は安心したように、手をつなぎ、二人は広場へと降りていった。すてきななあ。いいなあ。

あらゆる出来事が、当時の記憶を呼び起こす。それでも彼は――。

「すげえ綺麗だったよ」

一硬貨ぶんの時間が切れたのか、彼はのぞき込むのをやめて、私の横で町並みを眺めていた。

「これが、私たちが生まれ育った町、尾道。どう？」

「いい町だね。ハルも見てみなよ」

下を見ると、さっきの二人がベンチに座って笑い合っている。

「ほんとうだね。すごく、綺麗」

階段を再び降りて、広場に戻る。すると彼が「ここに行こう」とパンフレットの地図を指した。そこは、神代桜が咲く場所。私が初めて、彼とキスした場所だった。

高校三年生の春休み、私たちは千光寺を訪れた。春期講習の最終日、たまっていたストレスを発散するために二人で遊ぼうと校門前で待ち合わ

せをしていた。約束するのはいいものの、どこに行くかはなかなか決まらない、というのがいつもの流れだったが、彼が珍しく千光寺に行きたいと言い出した。特段行きたいところもなかったため、二つ返事でOKした。

二人で階段を駆け上がり、汗だくになりながらベンチに座ってラムネを飲んだ。展望台に上った。夕暮れに染まる尾道の町並みを眺めながら、いろんな話をした。テストのこと、家族のこと、進路のこと、そして私たちのこと。

どれもが今となってはかけがえのない思い出。またいつか来ようね、と指切りをした。

そして最後に向かったのが、今、私たちが目指している場所だった。

展望台のある出会いの広場を抜け、坂を下りふれあい広場を過ぎた先。アーチがかかっている道を進んでいくと神代桜の咲く広場がある。山梨に

あるお寺で二千年近く花を咲かせてきた桜の木がこのように言われているらしい。その子孫樹が、千光寺公園にも植えられている。一面に絨毯のように草が生え、その一番奥にぼつりと、木製の屋根とベンチがある。少し展望台から離れたからか、あたりに人影はなく、聞こえるのは風に揺られる木々の音と、鳥の囀り^{さえず}。まるでその空間だけ、世界から取り残されているようだと思っ

た。
二人で来た時はちょうど桜が満開だった。広場の周りを中心にして、四、五本ほど。そして、ベンチの正面にまだ私の身長にも届かないほどの、若木が一つ。オレンジ色の夕日を背景に、時折、花びらを散らしていた。柔らかく暖かい光が、私たちと木々を優しく包んでいた。アキはずっと写真を撮っていて、それを私が眺めていた。二人で撮った写真は、確か一枚だけ。数少ない、宝物だった。

二人で、隣どうしで、ベンチに座る。さつきよりも、すごくすごく緊張しているのが自分でもわかる。彼は何も言わない。私も何も言えない。そんな間が三分くらい続いた後、彼が呟いた。「前ここに来たときは高校三年生の時、って言うってっけ？」

「そうだよ。あのときは制服だったんだから」
「制服か……。何年前になるのかな」

「あれから十年たったよ。アキは全然変わってない」

「そうなの？ 自分じゃわからないなあ」
「それはそうでしょうね」

二人で笑い合う。
「あれから、いろんな事があったなあ。私たちが会うのも、アキが大学を卒業して以来だから六年ぶりになるのかしら」

「そんなに前のことなの？ てつきり頻繁に会ってるものかと思っていたよ」



そんなに会えていたらどんなに良かったか。

「お互い社会人だし仕事もあるからね。あの夜、おばさんから電話がかかってきたときびっくりしたよ」

「それは申し訳ない」

「本気で心配したんだからね。私泣きながら駆けつけたんだから」

「ごめんね」

「もういいよ。生きていてくれただけで良かった。それで、結局何をどれくらい覚えてるの？」

目を覚ました時、見えたのは白い天井、母さんの顔、おそらく医者と思われる人。ひどく頭が痛い。体がだるい。



「あなたの名前を教えてください」

「村上秋葉」

「生年月日はわかりますか」

「一九八九年九月八日」

「ここに居る人は誰かわかりますか」

「母さん」

「秋葉くん、君は、なんでここに居るかわかりますか」

「何でここに居るのか……。あれ、俺は何でここに居るんだ？ わからない。思い出せない。思い出そうとするとひどく頭が痛む。」

「あなたの職場はどこですか」

何も思い出せない。後から聞いた話だが、検査の結果、交通事故で頭を強く打っていてそれが影響したらしいとわかった。

「秋葉の記憶を取り戻すためにはどうしたら良いですか……」

「記憶というものは点ではなく、線で存在してい

ます。記憶どうしは密接に繋がっていて、あることを思い出すと他のことも思い出せる、と言う事例が数多く存在しています。一つの木の枝を揺らしたら他の枝も揺れるように。なにか小さなきっかけさえあれば記憶を取り戻すことはおおいに可能です。そのためには親交の深かった人と、昔の思い出や出来事を話すことが効果的だと言われています」

「秋葉くん、誰か仲のいい人、会いたい人はいるかな」

「よく私のこと覚えてたよね」

「忘れるわけ無いじゃん」

顔が紅くなっているのが自分でもわかる。本当にうれしい。

「でも、ハルのこと全部覚えてるわけじゃない

んだ。ずっと一緒にいたことは覚えているけど、
どんなことをしてきたのかはさっぱりで」

「高校の時のこと何か覚えてる？」

「断片的には」

「……じゃあ、高三の時の体育祭、どの団が優勝
したのか覚えてる？」

「俺のおかげで逆転優勝したやつでしょ？ 覚えて
る覚えてる」

「何でそれは覚えてるのよ……。じゃあ担任の先
生の名前は？」

「わからない」

「クラスで一番かわいかったのは？」

「覚えてない」

「……じゃあ、私が付き合ってたひとは？」

「……覚えてない」

彼は、私と付き合っていたことを覚えていない。

「付き合ってた人いたんだ。どんな人だったの？」

「馬鹿で、おっちょこちょいで、一度決めたこと
は絶対に譲らないほど強情で……」

「おいおい悪口ばかりだな」

「だけど、いつも、どんなときもそばにいてくれ
て、笑わせてくれた」

「……」

「私ね、本当に好きだったんだ」

「別れは彼から？」

「うん。『お互いのため』だって。ずるいよね。」

受験でこれから忙しくなるから、なんて」

「なんてやつだ、そんなやつ別れて良かったん
じゃないか？」

「ふふっ、本当ね。そのときわたしね、諦め
ちゃったんだ。彼が頑固だって知ってたから。も
う無理かって」

「……」

「ねえ、アキ。わたししたら良かったのか

な。もしアキだったら、どう思う？」

「えっ、俺だったら？」

「男子の一意見として聞かせてよ」

「そうだな……。俺だったら——反対して欲し
いかなあ」

今までこらえていた涙が、溢れた。

押さえられないどうしようもない感情をアキの
肩へとぶつける。

「痛っ、何でだよ」

「何ででも」

ほんと勝手すぎるよ。今のアキに言っても仕方
のないことではあるけれども。

でもきつと、そんなところも好きだったんだわ。

アキと別れた後、駅前広場の手すりにもたれか
かって、潮の流れと船をぼうっと眺めていた。

アキの記憶は結局戻らなかった。この事実にな
し、安堵している自分がある。記憶を取り戻すた
めと言う名目で、この先も側にいられるのだか
ら。もちろん、アキにとっては思い出したほうが
いいに決まっている。でも、もしアキが思い出し
たら私は、彼の隣にいられないかもしれない。も
し今のアキに好きな人がいたら——。

ああ、やっぱりまだ忘れられないんだなあ。我
ながらいつまで引きずっているのかしら。また、
じわりと涙がにじむ。次に会えるのはいつだろう
か。

たとえこの幸せが仮初めかりそめのものだとしてもかま
わない。願わくは、どうか——。



どこからともなく鈴虫の鳴き声が聞こえてくる。空には、銀色の丸い月が浮かんでいる。手すりにもたれかかるのを止め、ベンチに腰掛ける。少し肌寒い。まるでこころまで冷たい風が入り込んでくるようで、すこし寂しい。そうか、もう秋なんだ。

月に向かって手を伸ばす。その手は、空を切る。そして、また、涙がにじんだ。■